

キンメダイ 南インド洋

(Splendid alfonsino, *Beryx splendens*)



写真提供：大洋エーアンドエフ（株）

最近の動き

南インド洋公海域において、キンメダイは中層・着底のトロール漁業によって年間およそ3,000トンから5,500トン程度が漁獲されており、日本による漁獲量はそのうちおよそ200トンから2,400トン程度を占めている（図1、表1）。2012年に南インド洋漁業協定（Southern Indian Ocean Fisheries Agreement：SIOFA）が発効し、日本は2014年に批准した（亘ほか 2017）。2020年にはSIOFA科学委員会においてキンメダイの資源評価が行われたが、管理措置の策定には至っていない。

利用・用途

冷凍ラウンドの形状で主に加工材料として水揚げされ、干物、煮付け等として販売されている。

漁業の概要

南インド洋の公海域においては、東西の広い範囲が底魚漁業の漁場として利用されている。1970年代には、旧ソ連による調査操業、比較的浅い海域における手釣り漁業（Bensch *et al.*

2009）が行われ、また1977年、1978年には日本の漁船2隻による開発操業が行われた。1980年代に旧ソ連が商業的なトロール操業を開始し（Bensch *et al.* 2009）、キンメダイのほかにはロウソクチビキ類やメダイ類を主に漁獲していた（Ingole and Koslow 2005）。その後には、大規模なオレンジラフィ漁場の開発等の変遷を経て様々な国籍の漁船が同海域で操業し、近年ではキンメダイ・オレンジラフィを主対象とする中層・着底のトロール漁業が主体となっている（Bensch *et al.* 2009、亘ほか 2017）。

日本の漁船では、年によって1~2隻がキンメダイを主な漁獲対象として中層トロール操業を行っているが、2018年以降は1隻のみとなっている。これらの船はマダガスカル海嶺、南西インド洋海嶺、東経90度海嶺周辺の海山群を漁場として利用し、キンメダイのほかにミナミクサカリツボダイやクロシビカマス、ミナミクロメダイ、ナンキョクメダイ等を漁獲している（Delegation of Japan 2020）。日本船では他に、1隻の底はえ縄船がSIOFA海域内で操業することがあるが、その漁獲対象はマジェランアイナメであり、キンメダイは漁獲していない（Delegation of Japan 2020）。その他に、クック諸島のトロ

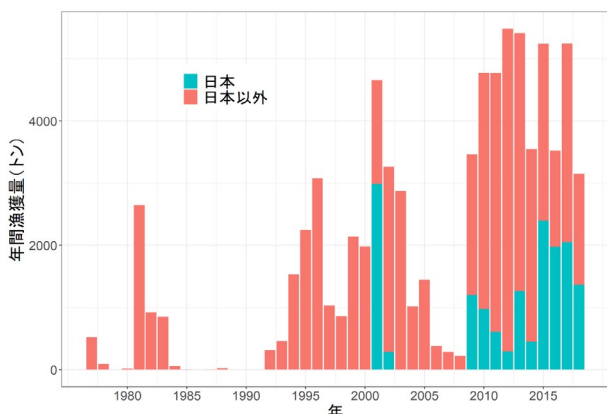


図1. SIOFA 海域における日本及び他国によるキンメダイ漁獲量の経年変化

データは Brandão *et al.* (2020) に基づく。2019年の日本による漁獲量は1,653トンだが、未公表の漁業国もあるため図には2018年までを示した。

表1. 日本及びその他の漁業国による海域別キンメダイ漁獲量(トン)

データは Brandão *et al.* (2020) に基づく。2019年の日本による漁獲量は1,653トンだが、未公表の漁業国もあるため表には2018年までを示した。海域はSIOFAにおける暫定的な管理単位に基づき、東経80度線を基準に東西に分けられている。

漁業国	日本			日本以外			合計
	東	西	合計	東	西	合計	
2009年	1,204	0	1,204	1,891	369	2,260	3,464
2010年	977	0	977	2,050	1,745	3,794	4,772
2011年	612	0	612	2,878	1,279	4,157	4,769
2012年	105	191	296	3,898	1,291	5,189	5,484
2013年	1,263	2	1,265	2,991	1,157	4,148	5,413
2014年	452	0	452	2,483	615	3,098	3,550
2015年	2,119	276	2,396	2,097	751	2,848	5,244
2016年	1,977	0	1,977	1,531	13	1,544	3,521
2017年	1,972	81	2,052	2,393	803	3,196	5,248
2018年	1,066	300	1,366	1,090	692	1,782	3,149

ール船がキンメダイ・オレンジラフィを主対象として操業しているほか (Delegation of the Cook Islands 2020)、2016年まではオーストラリアのトロール船がミナミクロメダイ、ナンキョクメダイ等とともにキンメダイを漁獲しており (Delegation of Australia 2020)、2011年から2013年には韓国船がキンメダイ等を漁獲していた (Delegation of Republic of Korea 2020)。

生物学的特性

【分類】

キンメダイ *Beryx splendens* は、キンメダイ目キンメダイ科キンメダイ属の一種である。キンメダイ属には本種の他にナンヨウキンメ *B. decadactylus* とフウセンキンメ *B. mollis* が含まれる。南インド洋にはこの3種が分布するが、漁獲されるのはキンメダイ・ナンヨウキンメの2種であり、フウセンキンメは漁獲物中には確認されていない (平野ほか 2014、亘ほか 2017)。北東インド洋ではフウセンキンメが大量に漁獲された例がある (柳本・小林 2012)。

ナンヨウキンメは体高や背鰭軟条数により他2種と容易に区別できる。フウセンキンメはかつて、キンメダイと同一種として扱われることもあったが、形態的 (Yoshino *et al.* 1999、Yoshino and Kotlyar 2001)、遺伝的 (Akimoto *et al.* 2006) な相違が明らかになり、現在では別種とされている。フウセンキンメは後鼻孔と鱗の形状、幽門垂や鰭条の計数形質によりキンメダイと識別可能とされているが (Yoshino *et al.* 1999、Yoshino and Kotlyar 2001、林 2013、池田・中坊 2015)、この近縁2種を外見から区別することは容易ではない。

【分布】

キンメダイは大西洋、インド洋、太平洋の温帯から熱帯域に分布し、大陸棚外縁、陸棚斜面や海山に生息する (水産庁 2008、Shotton 2016)。本種の分布域はナンヨウキンメとほぼ重なり (Shotton 2016)、フウセンキンメの分布域よりも高緯度まで広がる (Yoshino and Kotlyar 2001)。

本種は卵～幼魚期に表中層で浮遊生活を送る。秋元 (2007a) はいくつかの海域で漁獲された個体の最小尾叉長を元に、本種が尾叉長 12～18 cm の間に着底すると推察した。さらに耳石の微細輪紋が日輪であると仮定して、前述の尾叉長と微細輪紋数の関係から浮遊期の長さは 150～300 日間と推定した (秋元 2007a)。着底後は水深 200～800 m に多く生息し (Busakhin 1982)、日没から日出の間に中層に鉛直移動して採餌すると考えられている (Galaktionov 1984)。南西インド洋でも、夜間に浮上して明け方に海底近くまで下降し、この鉛直移動の速度は晴天時に速い傾向がみられる (蛭名ほか 2010)。

【産卵】

南インド洋におけるキンメダイの成熟・産卵に関する直接的な知見はほとんどない (Shotton 2014b)。他海域での知見によれば、卵巣内に完熟卵が出現する尾叉長は 28～35 cm (大西 1985、芝田 1985、Lehodey *et al.* 1997、秋元ほか 2005)、50%の個体が成熟する尾叉長 (FL₅₀) は概ね 31～35 cm であり (Lehodey *et al.* 1997、González *et al.* 2003、秋元ほか 2005、Shotton 2016)、我が国沿岸における繁殖開始年齢は 4～5 歳

と推定される (秋元ほか 2005)。ただし FL₅₀ は海域・研究ごとの違いも大きく、例えばチリの個体群では、40～44 cm と見積もられている (Flores *et al.* 2012)。卵母細胞の発達様式は非同期発達型であることから、一産卵期に複数回の産卵を行うと考えられている (増沢ほか 1975、Aleksiev 1986)。卵巣内卵数は日本近海の体長 40 cm 前後の個体で 30～50 万粒 (増沢ほか 1975)、ニューカレドニア海域の尾叉長 34～40 cm の個体で 27 万～38 万粒 (Lehodey *et al.* 1997) と推定されている。産卵期は海域によって異なるが (Flores *et al.* 2012)、日本近海では夏に産卵すると考えられている (増沢ほか 1975、芝田 1985)。

【食性】

南インド洋におけるキンメダイの食性に関する直接的な知見はない。一般にキンメダイの主な餌生物は、ハダカイワシ類等の中深層性魚類、イカ類、エビ類、オキアミ類であり (増沢ほか 1975、Dürr and González 2002、堀井 2007)、成長に伴い魚食傾向が強くなることが指摘されている (Dubochkin and Kotlyar 1989、堀井 2007、Horn *et al.* 2010)。天皇海山海域での胃内容分析によれば、オキアミ類、アミ類、ヨコエビ類、カイアシ類、翼足類、ハダカイワシ類、小型イカ類、海藻類が検出され (井口 1973、奈須・佐々木 1973、柳本 2004)、成長に伴いプランクトン食からマイクロネクトン食に移行する傾向が示されている (Nishida *et al.* 2016)。南西インド洋でも、大型個体の多い海山群では他の海山群と窒素・炭素の安定同位体比が異なり、成長に伴う食性の変化を反映している可能性がある (平野ほか 2014)。仔稚魚の食性は不明である (亘ほか 2017)。

【捕食者】

南インド洋における捕食者は不明である。日本近海ではサメ類やイルカ類による食害が報告されており (亘ほか 2017)、ナヌカザメの胃内容から記録されている (Taniuchi 1988)。その他の海域ではシイラ (Varghese *et al.* 2013)、メカジキ (Clarke *et al.* 1995)、タスマニアクジラ (Best *et al.* 2014) 等の胃内容から記録されている。

【系群】

ミトコンドリア DNA の部分塩基配列分析では、大西洋とインド洋・太平洋の間、並びに、北大西洋内の一部海域間に遺伝的分化が認められている。しかし、インド洋と太平洋間における遺伝的分化は認められず、大洋間で共通するハプロタイプが検出されている (Hoarau and Borsa 2000、柳本ほか 2015)。また、南西インド洋の海山群間でも遺伝的分化は認められていない (蛭名ほか 2011)。SIOFA では暫定的に、南インド洋のキンメダイ個体群を、東経 80 度を境界とする東西 2 つの管理単位に分けて取り扱っている (SC Head of Delegations 2020)。

【年齢と寿命】

本種の年齢は、耳石 (扁平石) の輪紋 (透明帯・不透明帯) の年周性に基づいて推定されてきた (Massey and Horn 1990、

表2. 南インド洋におけるキンメダイの年齢・体長関係の推定結果
耳石年輪に基づいて von Bertalanffy 成長式を推定した研究結果から、各年齢での推定尾叉長を計算した。Nishida (2020) を参照。

文献	海域	年齢/推定尾叉長(mm)						
		1	2	3	4	5	10	15
Brouwer <i>et al.</i> 2020	南東インド洋	214	238	261	283	303	392	461
Sawada and Okuda 2020	南西インド洋	247	273	294	311	325	363	377
Santamaría <i>et al.</i> 2006		194	222	247	271	292	376	431
Ivanin and Rebyk 2012		186	228	268	304	337	468	555
平野ほか 2014		211	224	236	247	258	306	343

Lehodey and Grandperrin 1996、Adachi *et al.* 2000、Rico *et al.* 2001、明神・浦 2003、Santamaría *et al.* 2006、秋元 2007b)。日本周辺での寿命は少なくとも 20 年を超え、耳石の年齢査定による最高齢は 26 歳(明神・浦 2003)である(亘ほか 2017)。南インド洋においても、耳石輪紋を用いた年齢査定が行われており(Santamaría *et al.* 2006、平野ほか 2014、Brouwer *et al.* 2020、Sawada and Okuda 2020)、南西インド洋では 16 歳(蛭名ほか 2011)、南東インド洋では 25 歳の個体が記録されている(Brouwer *et al.* 2020)。

南インド洋における本種の成長曲線を推定した研究は複数あるが(表2)、大型個体のサンプルサイズの不足等によって信頼性の低いものもある(平野ほか 2014、Nishida 2020)。後述する SIOFA 科学委員会での資源評価においては、Brouwer *et al.* (2020) による推定結果が最も妥当なものとして使用された(Nishida 2020)。

資源状態

2020 年の SIOFA 科学委員会において、年齢構成プロダクションモデルによる資源評価が行われた(Brandão *et al.* 2020)。東西いずれの管理単位も、2018 年時点の産卵親魚量は初期資源量の約 60%であり、MSY レベルよりも十分に高いと推定された。また、複数の漁獲シナリオを仮定した将来予測においては、2018 年時点よりも 40%多い漁獲量が継続するというシナリオでも、10~20 年間は資源量が MSY レベルを下回ることはないとされた。ただし、年齢別選択率の推定に必要な体長組成のデータがごく一部しか利用できない等、データの不足による課題も指摘された。とくに、自然死亡率の値によって将来予測の結果は大きく変化した。このような不確実性はあるものの、現時点では最新の資源評価結果に基づいて、資源水準は高位と判断した。推定された産卵親魚量の時系列によれば、とくに南西インド洋の管理単位では 2009 年から 2018 年にかけてほぼ一貫した減少傾向がみられるため、資源動向は減少とした。

また異なる観点からの評価として、Shotton (2014a) は加入当たり漁獲量を試算した。それによれば、漁獲開始年齢を 2.8 歳(標準体長 22 cm) から 8.4 歳(標準体長 35 cm) に引き上げれば、漁獲量は 10 倍程度に増大すると計算された。

管理方策

SIOFA において、キンメダイをとくに対象とした保存管理措置は現時点では存在しない。底魚漁業全体への管理措置(SIOFA CMM 2019/01)として、漁獲量・努力量を過去の平均レベルに制限し、既存漁場外での操業を行わないこと、及び

科学オブザーバーの 100%乗船が義務付けられている。

執筆者

外洋資源ユニット
外洋底魚サブユニット
水産資源研究所 水産資源研究センター
広域性資源部 外洋資源グループ
澤田 紘太・奥田 武弘

参考文献

Adachi, K., Takagi, K., Tanaka, E., Yamada, S., and Kitakado, T. 2000. Age and growth of alfoncino *Beryx splendens* in the waters around the Izu Islands. *Fish. Sci.*, 66: 232-240.

秋元清治. 2007a. ミトコンドリア DNA 分析によるキンメダイの集団遺伝構造及び卵仔魚の分布様式の解析. 神奈川県水産技術センター論文集, 1: 1-64.

秋元清治. 2007b. 伊豆諸島周辺海域におけるキンメダイの年齢と成長. 神奈川県水産技術センター研究報告, 2: 13-19.

Akimoto, S., Itoi, S., Sezaki, K., Borsa, P., and Watabe, S. 2006. Identification of alfoncino, *Beryx mollis* and *B. splendens* collected in Japan, based on the mitochondrial cytochrome b gene, and their comparison with those collected in New Caledonia. *Fish. Sci.*, 72: 202-207.

秋元清治・久保島康子・三谷 勇・斎藤真美. 2005. 伊豆諸島周辺海域におけるキンメダイ *Beryx splendens* 雌の成熟. 日本水産学会誌, 71(3): 335-341.

Alekseev, F.E., Alekseev, E.I., Trunov, I.A., and Shlibanov, V. I. 1986. Macroscale water circulation, ontogenetic geographical differentiation and population structure of alfoncino, *Beryx splendens* Lowe, in the Atlantic Ocean. *ICES CM* 10. 16 pp.

Bensch, A., Gianni, M., Gréboval, D., Sanders, J.S., and Hjort, A. 2009. Worldwide review of bottom fisheries in the high seas. *FAO Fisheries and Aquaculture Technical Paper*. No. 522, Rev.1. Rome, FAO. 145pp.

Best, P.B., Smale, M.J., Glass, J., Herian, K., and Heyden, S.V.D. 2014. Identification of stomach contents from a Shepherd's beaked whale *Tasmacetus shepherdi* stranded on Tristan da Cunha, South Atlantic. *J. Mar. Biol. Assoc.*, 94: 1093-1097.

Brandão, A., Butterworth, D.S., and Johnson, S. 2020. Age-Structured Production Model (ASPM) assessments of the Alfonso (*Beryx splendens*) resource in the SIOFA area of the

- Southern Indian Ocean. 5th Meeting of the Science Committee. SC-05-29. 39 pp.
- Brouwer, S., Wragg, C., Wichman, M., and Nicholas, T.-R. 2020. Alfonsino age and growth - rev1. SIOFA SERAWG-02-07.
- Busakhin, S.V. 1982. Systematics and distribution of the family Berycidae (Osteichthyes) in the world ocean. *J. Ichthyol.*, 22: 1-21.
- Clarke, M.R., Clarke, D.C., Martins, H.R., and Silva, H.M. 1995. The diet of swordfish (*Xiphias gladius*) in Azorean waters. *Arquipélago* 13A: 53-69.
- Delegation of Australia. 2020. Australia's Annual Report. SIOFA SC-05-09. 16 pp.
- Delegation of Japan. 2020. Annual National Report of Japan. SIOFA SC-05-22. 18 pp.
- Delegation of Republic of Korea. 2020. National report of Korea to 5th Scientific Committee of SIOFA. SIOFA SC-05-12. 9 pp.
- Delegation of the Cook Islands. 2020. National Report – Cook Islands. SIOFA SC-05-11. 10 pp.
- Dubochkin, A.S., and Kotlyar, A.N. 1989. On the Feeding of Alfonsino (*Beryx splendens*). *J. Ichthyol.*, 1: 1-7.
- Dürr, J., and González, J.A. 2002. Feeding habits of *Beryx splendens* and *Beryx decadactylus* (Berycidae) off the Canary Islands. *Fish. Res.*, 54: 363-374.
- 姥名儀富・高橋晃介・越智洋介. 2010. 平成21年度海洋水産資源開発調査事業報告書(システム対応型:遠洋底びき網〈全層トロール〉:南インド洋西部公海域). 独立行政法人水産総合研究センター 開発調査センター. 24 pp.
- 姥名儀富・柳本 卓・星野浩一・岡本 誠・高橋晃介・越智洋介. 2011. 平成22年度海洋水産資源開発調査事業報告書(システム対応型:遠洋底びき網〈全層トロール〉:南インド洋西部公海域). 独立行政法人水産総合研究センター 開発調査センター. 59 pp.
- Flores, A., Wiff, R., Gálvez, P., and Díaz, E. 2012. Reproductive biology of alfonsino *Beryx splendens*. *J. Fish Biol.*, 81(4): 1375-1390.
- Galaktionov, G.Z. 1984. Features of the schooling behavior of the Alfonsina, *Beryx splendens* (Berycidae) in the thalassobathyal depths of the Atlantic Ocean. *J. Ichthyol.*, 24: 148-151.
- González, J.A., Rico, V., Lorenzo, J.M., Reis, S., Pajuelo, J.G., Afonso Dias, M., Mendonça, A., Krug, H.M., and Pinho, M. R. 2003. Sex and reproduction of the alfonsino *Beryx splendens* (Pisces, Berycidae) from the Macaronesian archipelagos. *J. Appl. Ichthyol.*, 19: 104-108.
- 林 公義. 2013. キンメダイ. *In* 中坊徹次(編), 日本産魚類検索第三版, 東海大学出版会, 神奈川. 577-578 pp.
- 平野満隆・山口 紘・佐谷守朗・高橋晃介・越智洋介. 2014. 平成24-25年度海洋水産資源開発調査事業報告書(遠洋底びき網〈南インド洋西部公海域〉). 独立行政法人水産総合研究センター 開発調査センター. 52 pp.
- Hoarau, G., and Borsa, P. 2000. Extensive gene flow within sibling species in the deep-sea fish *Beryx splendens*. *C.R. Acad. Sci. Paris*, 323: 315-325.
- 堀井善弘. 2007. キンメダイの食性を明らかにして資源管理方針に役立てる. 平成18年度東京都島しょ農林水産総合センター主要成果集.
<https://www.ifarc.metro.tokyo.lg.jp/archive/26,360,52,215.html> (2020年11月4日)
- Horn, P.L., Forman, J., and Dunn, M.R. 2010. Feeding habits of alfonsino *Beryx splendens*. *J. Fish Biol.*, 76: 2382-2400.
- 井口健一. 1973. 北部中央太平洋における底びき網漁場企業化調査概要 II. 水産海洋研究会報, 23: 47-56.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. キンメダイ・フウセンキンメ. *In* 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 神奈川. 78 p.
- Ingole, B.S., and Koslow, J.A. 2005. Deep-sea ecosystems of the Indian Ocean. *Indian J. Mar. Sci.*, 34(1): 27-34.
- Ivanin, N., and Rebyk, S. 2012. Age, growth parameters and some aspects of reproduction of alfonsino *Beryx splendens* Lowe on the Southwest Indian Ridge. YugNIRO, Ukraine. Working Paper. Workshop on Assessment and Management of Alfonsino Fisheries. FAO, Rome, Italy, 10-12 January 2012. 4 pp.
- Lehodey, P., and Grandperrin, R. 1996. Age and growth of the alfonsino *Beryx splendens* over the seamounts off New Caledonia. *Mar. Biol.*, 25: 249-258.
- Lehodey, P., Grandperrin, R., and Marchal, P. 1997. Reproductive biology and ecology of a deep-demersal fish, a lfonsino *Beryx splendens* over the seamounts off New Caledonia. *Mar. Biol.*, 128: 17-27.
- Massey, B.R., and Horn, P.L. 1990. Growth and age structure of alfonsino (*Beryx splendens*) from the lower east coast, North Island, New Zealand. *N. Z. J. Mar. Freshw. Res.*, 24: 121-136.
- 増沢 寿・倉田洋二・大西慶一. 1975. キンメダイその他底魚類の資源生態. 水産研究叢書, 28, 日本水産資源保護協会, 東京. 105 pp.
- 明神寿彦・浦 吉徳. 2003. 高知県産キンメダイの年齢と成長. 黒潮の資源海洋研究, 4: 11-17.
- 奈須敬二・佐々木 喬. 1973. 開洋丸による中部太平洋海山調査. 水産海洋研究会報, 23: 56-70.
- Nishida, T. 2020. Comparisons of four splendid alfonsino growth equations in the SIOFA CA. SIOFA SERAWG-02-INFO-01 (REV_1). 4 pp.
- Nishida, K., Murakami, C., Yonezaki, S., Miyamoto, M., Okuda, T., and Kiyota, M. 2016. Prey use by three deep-sea fish in the Emperor Seamount waters, North Pacific Ocean, as revealed by stomach contents and stable isotope analyses. *Environ. Biol. Fish.*, 99(4): 335-349.
- 大西慶一. 1985. キンメダイの資源補給に関する研究—(2) 産卵生態について. 伊豆分場だより, 219: 6-8.
- Rico, V., Lorenzo, J.M., González, J.A., Krug, H.M., Mendonça, A., Gouveia, E., and Afonso Dias, M. 2001. Age and growth of the alfonsino *Beryx splendens* Lowe, 1834 from the Macaronesian archipelagos. *Fish. Res.*, 49: 233-240.
- Santamaría, M.T.G., Abellán, L.L., and González, J.F. 2006.

Growth of alfonso *Beryx splendens* Lowe 1834 in the South-West Indian Ocean. *Afr. J. Mar. Sci.*, 28(1): 33-40.

Sawada, K., and Okuda, T. 2020. A preliminary estimation of the splendid alfonso growth equation in the south-western Indian Ocean. SIOFA SERAWG-02-08. 7 pp.

SC Head of Delegation. 2020. SIOFA splendid alfonso management units for stock assessments and managements. SIOFA SERAWG-02-INFO-02. 4 pp.

芝田健二. 1985. 房総海域におけるキンメダイについて—I 成熟と性比. 千葉県水産試験場研究報告, 43: 3-9.

Shotton, R. 2014a. Yield per Recruit analysis of alfonso and implications for their management in the Southern Indian Ocean. SIODFA Tech. Rep. 14/01. 16 pp.

Shotton, R. 2014b. Age and size at maturity of alfonso and implications for their management in the Southern Indian Ocean. SIODFA Tech. Rep. 14/02. 8 pp.

Shotton, R. 2016. Global review of Alfonso (*Beryx* spp.), their fisheries, biology and management. FAO Fisheries and Aquaculture Circular. 153 pp.

水産庁. 2008. Appendix D: キンメダイの資源評価. Information describing splendid alfonso (*Beryx splendens*) fisheries relating to the North Western Pacific Regional Fishery Management Organisation. 22 pp. http://www.jfa.maff.go.jp/j/study/pdf/appendix_d.pdf (2020年11月4日)

Taniuchi, T. 1988. Aspects of reproduction and food habits of the Japanese swellshark *Cephaloscyllium umbratile* from Choshi, Japan. *Nippon Suisan Gakkaishi* 54(4): 627-633.

Taniuchi, T., Kanaya, T., Uwabe, S., Kojima, T., Akimoto, S., and Mitani, I. 2004. Age and growth of alfonso *Beryx splendens* from the Kanto District, central Japan, based on growth increments on otoliths. *Fisheries Sci.*, 70: 845-851.

Varghese, S.P., Somvanshi, V.S., John, M.E., and Dalvi, R.S. 2013. Diet and consumption rates of common dolphinfish, *Coryphaena hippurus*, in the eastern Arabian Sea. *J. Appl. Ichthyol.*, 29: 1022-1029.

亘 真吾・米沢純爾・武内啓明・加藤正人・山川正巳・萩原快次・越智洋介・米崎史郎・藤田 薫・酒井 猛・猪原 亮・宍道弘敏・田中栄次. 2017. キンメダイの資源生態と資源管理. 水産研究・教育機構研究報告, 44: 1-46.

柳本 卓. 2004. 天皇海山における底魚漁業とキンメダイ *Beryx splendens* の生物学的特性. 黒潮の資源海洋研究, 5: 99-109.

柳本 卓・小林敬典. 2012. インドネシアでキンメダイとして漁獲された魚の正体について. *DNA 多型*, 20: 143-147.

柳本 卓・酒井 猛・越智洋介・蛭名儀富・藤野忠敬. 2015. mtDNA 調節領域の塩基配列により推定されたキンメダイの集団構造. *日本水産学会誌*, 81: 958-963.

Yoshino, T., Kon, T., and Miura, A. 1999. Morphological Differences between *Beryx splendens* Lowe and *B. mollis* Abe (Teleostei: Beryciformes: Berycidae). *Bull. Fac. Sci., Univ. Ryukyus*, 67: 77-86.

Yoshino, T., and Kotlyar, A.N. 2001. World distribution of

the Baloon Alfonso, *Beryx mollis* (Pisces: Beryciformes: Berycidae). *Bull. Fac. Sci., Univ. Ryukyus*, 72: 119-123.

キンメダイ (南インド洋) の資源の現況 (要約表)

資源水準	高位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	3,149~5,248 トン 最近 (2018) 年: 3,149 トン 平均: 4,142 トン (2014~2018 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	452~2,396 トン 最近 (2018) 年: 1,366 トン 平均: 1,649 トン (2014~2018 年)
管理目標	未定
資源評価の方法	年齢構成プロダクションモデル
資源の状態	資源評価結果によれば、産卵親魚量は MSY レベルより十分に大きく、漁獲圧も MSY レベルより低い。ただしデータ不足による不確実性がある。
管理措置	SIOFA 保存管理措置 ・漁獲量・努力量を過去の平均レベル以下に制限 ・既存漁場外の操業を禁止 ・科学オブザーバーの 100%乗船
管理機関・関係機関	SIOFA
最近の資源評価年	2020 年
次回の資源評価年	未定